

死後生問題と量子波動論

著者	佐藤 明雄
雑誌名	甲南大學紀要. 文学編
号	167
ページ	95-99
発行年	2017-03-30
URL	http://doi.org/10.14990/00002351

死後生問題と量子波動論

佐藤 明雄

はじめに

先般、甲南大学紀要（文学編167・2016年3月）に掲載された拙稿『文明の危機と近代スピリチュアリズム』の抜き刷りを恵贈した、古い友人の聡明なる一婦人から、その書評に代えて、ご自身の死生観を認めた長いお手紙を頂いた。その結論として、彼女は「自分は、人間は死後は土に還り、無になるだけであると信じている」とあった。それは現代の多くの教養ある知識人に共通した考えであり、決して驚くことではない。

しかし、その手紙の末尾近くには「それでも私は毎朝、主人の寫眞にご飯と水を供えて、今日も家族の安全と幸福を守り給え、と祈っていますし、道で危うく躓きかけて事なきを得た時は、思わず主人に感謝の手を合わせます・・・」と書いておられた。

それは土に還り無となった相手には通ずるべくもない無意味で、不毛な行為であるはずである。にも関わらず、こうした彼女の行為は何を意味しているのだろうか。彼女の唯物的知性は、そうした意識的、あるいは無意識的な「裏切り行為」を、敢えて容認しているのであるが、これは何も彼女に限らず、全ての知識人のとる「ダブルスタンダード」でもある。

すなわち「土に還って無になった」と知りつつ拝礼し、感謝する。この事実には、頭と心の間にさし挟まった矛盾があり、非整合性があるが、死後生問題は、このように未決の問題として、折に触れて再思、再考を我われに求めて止まないものである。

(1)

人は生れた以上、すべての生物と同じく、その一定寿命を終えた後は必ず死を迎える。その場合に誰しもが思うのは、「死後にも生があるか否か」の問題である。すなわち肉体の生の終りが、直ちに人の生の完全な終りを意味するのか、或いは、その霊魂は肉体と離れて、死後もどこかに存続し続けるか、ということ

ある。

かかる問題は、かつては宗教が好んで説いたことであるが、宗教は既に長くそのことに触れず、種々の宗教が説いた「地獄・極楽」説話も、最早宗教が説くことはない。宗教は、専ら教義、経典の解釈と解説や寺院伽藍の建立と、それを飾る絵画や彫刻に力を注ぎ、死後生や霊界への関心を持つこともなくなった。

さて、この霊魂不死に関する議論は、人類の長い歴史の中で繰り返された、古い議論であると考えられる人は多いかも知れないが、事実はそうではない。古代エジプトやチベットの『死者の書』、各種『霊言集』、ダンテの『神曲』をはじめ、未開、文明を問わず、民族や地域を問わず、古代から伝えられる神話や伝承では、何らかの形で「死後の世界」が描かれ、信ぜられ、死後が無に帰するという考えの方が、むしろ少数であったと言えるのである。

それを覆して、人びとの心に死後生への懐疑と否定を植え付けたものが、近代の唯物科学であり、その最たるものが、ダーウィンの進化論であったことは異論のないところである。この科学思想は徐々に人々の心から「死後生への信仰」を奪ってゆくことになり、ここに知識と信仰の乖離分裂が始まることになった。

その様な風潮の中で、死後生問題が改めて世を賑わせることとなったのが、1849年に米国ニューヨーク近郊の街ハイズヴィルで起こったフォックス姉妹による躁霊事件であり、これを契機として欧米には「近代スピリチュアリズム」と呼ばれる、心霊現象の科学的研究会が生まれることになる。その代表的な例が、19世紀末期の英国のケンブリッジに設立された「英国心霊科学協会」であるが、その会員にはノーベル物理学賞のオリバー・ロッジやウィリアム・クルックスや哲学者アンリ・ベルクソンなど、当時の科学者、哲学者、心理学者の錚々たる学者が参集し、霊媒を用いた公開の降霊実験会など、科学的精査が行われ、これによる写真を含めて膨大な資料の蓄積が行われた。しかし、それによって霊や死後生の問題に関して、何らかの決定的成果を挙げるには至らず、当時の保守的な宗教界、

科学学会に無視される結果、その活動は立ち消えてゆくことになった。

ニュートンやデカルトによる、機械論的、唯物論的世界観の普及の過程で、心は思考作用となり、靈魂は大脳作用の所産とされ、人間も巧みに組み立てられた「自動機械」となる。さらに19世紀には、ダーウィンの唯物論的進化論は、人と神との絆を断ち切って、ニーチェをして「神は死んだ」とニヒリズム宣言をさせたが、それによって人々は、長く保っていた靈魂不死の信仰を打ち砕かれることになったのである。

さて、実証科学万能の21世紀の今日ではもはや、「死後生問題」が、学的研究や議論の対象になる場面はない。何故なら科学界を支配する大勢は、依然として質点的ニュートン力学の物質観の支配する所である。まして、実験は、「同一の条件において、実験者や場所時間を問わず、同一の実験結果を生む」という、反復実証実験を基準とし、死後生問題のごときが、科学的関心の対象となることはあり得ない。

しかしそれにも関わらず、世界各地の市井で起こる心霊・幽霊現象の報告は今日も後を絶たず、わが国においても、先の東日本大震災後の、現地で発生する心霊・幽霊現象の目撃例、体験例の報告は数多く、NHKがそれらについて何回かの特別番組を作成、放映した程である。それにコメントする評論家のほとんどは、これらを「非日常的環境において生ずる、悔恨や同情の心理的作用のもたらす幻覚」などの脳内現象と、合理的に解釈がされることが多いが、現に残されている映像、音声の物的証拠は、どの様に解釈されるのか。

タクシーに乗り込んだ“一人の女性”が言ったという「私は死んだのでしょうかね・・・」という言葉ほど、初めて死を体験した人間の偽らぬ感懐を表して、切実なものはない。

運転手が送り届けた目的先でその女性の姿は消え、走行メータの記録は残るが、その会計処理はどうなるか。幽霊現象は、単なる茶飲み話には終わらないのである。

(2)

「事実は頑固である」とは、ダーウィンに抗して、進化論に「霊的流入説」を採ったアルフレド・ウォーレスの言葉である。もし科学が死後生を全面的に否定するならば、これら過去に蓄積された膨大な数の

「頑固な事実」をどうするか。その無数の実験結果や体験や記録について、その虚偽なること、集団幻覚や錯視、錯覚、幻聴であることを、心理学的、実証的に証明しなければならないが、科学はウォーレスの言うこれら膨大な数の「頑固な事実」を、すべて打ち砕く強固な斧をもっているであろうか。

しかも、そこで真偽の判断の基準となすものが、古典的なニュートン物理学に基づく唯物論的科学以上のものではないとしたら、到底対応できるものではないであろう。

しかし同じ物理学とはいえ、現代の量子力学が明らかにする「物質」の概念は、従来のそれとは全く異なったものになっていることに注目してみよう。

すなわち、全宇宙物質を構成する素材である「素粒子」は、「粒子であると同時に波動」という両面の性格を併せ持っているということ、更にその素粒子の在り方が、時間・空間に拘束されることのない「非局在性」という性格である。平たく言えば、物は同時に複数の場所に存在し得るし、かつまた、過去、現在、未来の時間に拘束されることもないというのである。まさに超常現象を地で行くような話であるが、そこに近年の多世界論やパラレル世界論が生まれる根拠がある。

この素粒子の有する「粒子性」と「波動性」の2つの性格は、ニールス・ボーアの「相補性原理」に従って、相補的であり、その意味では両者は等価的と考えられてきたが、最新のイラン系米国人のシャーリア・アフシャー博士らの実験結果では、「粒子性が観察されている時には、波動性は現れているが、波動性が確認されている時には、粒子性は現れていない」ことが明らかにされている。つまりは、粒子性と波動性は、相補的かつ等価的であるのではなく、粒子性はむしろ波動性の創り出す、一様態に過ぎないかのごとき、実験結果となっているのである。これを敷衍して考えてゆくと、我われが普通に宇宙において堅固なる物質と認識している一切のものは、実際は物質ではなく、複雑に相互作用している波動に他ならぬ、ということの意味するものである。

これが事実であるとしたならば、「物質」の实在を前提にして組み立てられてきた「物質科学」の全面的な見直しが迫られることであろう。

さて、死後生を否定する人のよく使う表現に、「土に還って無になる」という言葉がある。肉体という物質が消滅し、その後は、大脳作用の所産である心や靈魂も共々に消滅してしまう、との考えである。しかし、

無になるとされる肉体も大脳も、その組成は素粒子に還元され、その素粒子は、かの『般若心経』が「色即是空 空即是色、不生不滅なるもの」である。たとえそこに滅するかに見えるものがあるとしても、それは素粒子のもつ「粒子」レベルのものであり、「波動」レベルにおける素粒子は永遠に不滅と、理解すべきであろう。

人間には生前にも、肉体や感覚と呼ばれ、時間・空間的に限定された局在的一面と、こころや魂や靈魂と呼ばれる、時空的に限定されない非局在的一面の、両側面がある。後者の心的な働きが非局在的であることは、とりも直さず、人間が生前において既に、粒子的作用のみならず、波動的作用を営んでいることを意味する。

死後に、その肉体の粒子的側面は土に還って消滅しようとも、肉体を離れて100%の霊体となった人間の波動的作用は、生前の自己のままに、その性格や理想、願望、趣味、趣向を保持し続けると考えるべきであろう。それなくしては、自然の大原則である「連続性」の法則は成り立たないからである。

周知のように、この世界にはあらゆる種類の波動が、音波、光波、電波、電磁波、重力波として、日夜飛び交っている。その電波の波長に受信器を合わせれば、我われが日常に見聞するごとく、美しい音声や画像となるが、その波長に同調させない限り、豊饒の情報を内蔵した電波もすべて、無縁で無に等しいものに終わる。その量子波動は、エネルギーや力として作用するのではなく、情報伝達の波動として働くものであり、それはエネルギーを伴わず、物理学では非ベクトル的な「スカラー波」と呼ばれる、情報のみを伝える波動である。

この様に、我われが霊界と称している死後の世界も、それが実在する限り、宇宙理論の一つである量子物理学と無縁ではあり得ず、その波動論によって一定の理解を試みることは、決して不都合ではないと考える。人は、肉体が変じて波動となることの変化を、理解し難いかもしれないが、例えば、土中の蛹が、羽化して美しい蝶となることを思えば良い。蛹の蝶への豹変は、信じがたいことかも知れないが、事実である。

更に言えば、生あるところ、死が必然にして不可避であるのは、単に生物学的寿命やエネルギーの消尽の理由によるのではない。それは死が、魂の目的とする、進化と向上のためには、必須にして不可欠なステップ・アップであるからである。乳幼児がいつかは、母親の心地よい懐から独立するように、また幼稚園、小学校、

中学校と、教育ステップの向上ごとに別れを繰り返すのは、人の世の常である。

キタキツネ母子の辛く、悲しい「子別れの儀式」は、見る人の心を打って止まない。

厳しい冬の大地に独り立ちさせるために、追いつがるわが子を繰り返して拒み、追いつ返す母キツネの心中は、子キツネ以上に辛いであろう。自然の摂理とはいえ、余りにも悲しいが、この様に、自然の舞台には、それぞれのステップにおいて、独立と成長と進化に欠かせない、辛く悲しい別れが待っている。人の死もその一つであるが、それは決して別離や断絶を意図して定められた否定的な運命ではない。

(3)

蟲や魚や鳥や動物などの生物も人間と同様に、死を運命づけられた存在である。しかし、彼らには人間に見られる様な死別の悲哀はない。人間は死を恐れ、死を悲しむ特殊な存在なのである。宇宙存在は本来、無限の連続における発展と進化向上の過程であり、その中に断絶や分断や分離の入る余地は毫もないものである。従って人間の死も、その無限の連続の過程における、一現象に過ぎないものと視なされるべきである。

しかし、人間が他の生物と異なって、死を「死別」「永別」などの「断絶」の観念で捉えるに至ったのは何故か。それは他ならぬ「ロゴスの知性」の影響と考えてよいであろう。分析、分断、分離、分割、そして断絶こそは、ロゴスの知性の独壇場なのである。知の木の実を食べた人間は、ロゴスを得た代償に、宇宙自然には本来存在することのない「断絶」の観念を抱き、これを特に「死」において、死を永遠の別離と捉え悲しむ、唯一の生物となったのである。

この様なロゴス的思考は、人間独自の優れた能力として、人間自らの賞揚する所ではあるが、自然全体の世界から見ると、ロゴスの理解は偏狭かつ一面的解釈に過ぎず、死を永別と断絶と捉える決定的誤謬を与える結果になったことは、人類の痛恨事であり、そこに「死」について、新しい理解が求められる理由があるのである。

さて、死後生の事実を、全くの虚妄か幻想か想像として、それで納得する向きは別として、ウォーレスの言う数多い「頑固なる事実」における整合性、首尾一貫性を求める限り、現在時点、量子波動論を措いては、より合理的、より一貫的な解釈を見出すことは困難なようである。専門科学者の今後の研究に期待する所

である。

また一方、死後生に関する議論において従来の欠陥は、それを語るに足る実験、実証のデータの欠如にあった。しかし、近年にわかに注目されてきたのが、医学の進歩による「臨死体験」、「幽体離脱」などの増加による、いわゆる“死後生”や“霊界体験”の報告である。その多くは臨死状態の患者が見聞きした体験の証言であるが、その最たるものが、著名な脳神経科学者のエベン・アレクザンダー博士自身による、詳細な臨死体験報告である。博士は自らの一週間におよぶ臨死状態からの生還後、残された多くのCT写真などの分析を加えることによって、死後の生の無ではないことを説いている。今後これらの専門科学者の報告が蓄積されて、古き多くの『霊言集』やスエーデンボルクの『霊界通信』などに加えて、新しい死後生の実証資料となることを望んで止まない。

(4)

死後生問題は、人類に残された難問題ではあるが、筆者はこれを単に哲学の一問題として見るのではない。今その解明の喫緊緊急なることを主張する理由がある。それは人類が今や、かの終末時計が「人類破滅3分前！」を示す如くに、核戦争、テロ、環境破壊、自然の大災害、気候変動、水不足、麻薬拡散、パンデミック疫病等の危機的な状況に曝されているが、その主たる原因は、百数十年以来、この地上に蔓延し続けるニヒリズムにあると考えるからである。それは端的に言えば、死後生への希望の喪失と、それに伴う道徳的秩序の崩壊、価値観の散逸、虚無的な欲望と快楽の拡大であり、それら全てが根本的には、近代の唯物科学が人々に植え付けてきた死後生の否定と、來世世界への希望喪失に由来すると考えるからである。

その事に逸早く警鐘を鳴らしたのは、フランスの哲学者、アンリ・ベルクソンであった。彼自身が、上述の「英国心霊科学研究所」の会長を務めつつ、1930年代の著作において、文明の崩壊の危機を訴え、それが人々の心に巣食うニヒリズムによることを指摘、その回避のためには心霊研究の必須なることを、力説したのである。

しかし一方、「宇宙の誕生も生命の進化の中での人類の誕生も希望も愛も信念も、全ては冷たい原子の偶然の配列の結果で、そこには意味や目的の微塵も存在しない」と断じた哲学者バートランド・ラッセル。「科学的手法で宇宙や人間の存在に意味を発見できる

ことはない」と語った著名な宇宙物理学者のスティーブン・ワインバーグ。また『神は妄想なり』の著者の遺伝学者リチャード・ドーキンス。これら現代を代表する科学者たちの言葉を聴いた後に、誰が愛と善意を実行する勇気を持てるであろうか。

聖書の教えに従い、忍耐と期待をもって働き、育て、その果実の結実を夢見た、天国や愛と善意が、全くの「不当り証書」であることを、これら権威ある科学者たちの言は示しているのである。洋の東西、民族と国家、老若男女を問わず、虚無感に蔓延し、それがあつた時は暴力闘争や紛争と戦争になり、ある時はバーチャルな欲望と快楽の追求と増幅、そのための麻薬・薬物の蔓延に、またある時は留まることのない蓄財と格差の拡大へと繋がってゆく。世界の富の半分を独占する大富豪の数は、1年前の80人から更に減って62人になり、一方、世界の「奴隷状態の人間数は58万人」と伝えられるが、それが21世紀今日、我われ文明世界が創り出した世界の現実である。

これを生み出したのが、唯物的な近代科学の申し子たるニヒリズムであるが、その克服の方途は何処にあるか。それが古い教義教説を説く宗教や信仰や善意の奉仕のよく為し得るところではないことは明白である。

幸いにも、西洋医学には古来「同種医療」(homeopathy)と呼ばれる療法がある。病気を作りだしたと同種の病原の利用による病気の治癒を意味するものである。

人類の宿痾たるニヒリズムを生んだものが、近代の唯物科学であったとしたら、その病原からの解放もまた科学によってなされるべきなのであり、科学自身が「量子物理学」という格好なる新科学を提供してくれているのである。

「新しき酒は新しき革袋に」と言われる。古き伝統的宗教の説く、死後生議論と異なり近代スピリチュアリズムなどが醸成した「死後生論」の新しい酒は、古き伝統的宗教の教義にも馴染まず、ましてニュートンの古い革袋の耐えるところではない。それには、物質観の転換が必要であり、その骨子をなすものが、上述の如く、量子力学の言う「波動」の概念である。量子理論なる新しい革袋によってこそ、新しい酒は、その芳醇な味と香りを発揮するのである。

(5)

さらに、心霊問題と物理学と言え、当然その関係

に疑問を呈する向きは多いであろう。しかし炯眼なる読者は、上に述べた量子論における物質概念の変貌や量子の波動論などを理解すれば、量子と心霊との間にある特別深い親近性について、一定の理解を期待することは、強ち不合理とは言えないであろう。しかも量子理論の基本テーゼには「宇宙において万物は相互に結びついている」と言われる様に、宇宙は一部の科学者の言うように「慄然とする程の冷酷で非人間的な世界」ではない。

ビッグバンによる宇宙の創成以来、その進化の過程を見れば、宇宙論学者の示す多くのデータが示す様に、宇宙の進化の現実には、「愛」と呼ぶ以外には相応しい表現のないほどの、人間出現に向けた、極々微の微調整の連続であり、そのことの直観を得た先哲たちが「神は愛なり」と喝破した所以である。

近年、ブランドン・カーターやロバート・デイクなど一部の宇宙論学者が提唱する「宇宙の人間原理」は、この様に宇宙の発生以来、その進化の過程は恰も「人間が現在かくあるために計画された、としか考えられない」とする理論であるが、それが真実であれば、そこには当然のこと、人間の死後や心霊問題の置かれるべき位置も欠かせるものではないであろう。

人は、人間の魂の死後生とその霊界における平安を祈って、各宗教に法要やミサを託するが、そのことの効果を人は知らない。イエスは、亡父の葬儀を営むことを乞うた青年に「死者は死者をして葬らしめよ」と述べたと聖書は伝えるが（ルカ伝第9章）、イエスは葬送の意味を認めなかったかのようなのである。事実、慰霊や鎮魂において、核心となるべきものは、儀式や典礼や読経ではない。唯一そこに欠くべからざるものは、故人への感謝や追慕や愛の「祈り」であり、「愛なる思い」に尽きるであろう。その「祈りと思い」は、故人になじみのない経典や儀式などの一切の虚飾を排し

て、量子論的波動として、一挙に故人のみ霊に達し得るのであり、人はそのことを、予め魂に刻印された知識として知っているかの様である。その「思い」の果たす働きは、時空を超えた量子論の「非局在性」の極致であるが、これを名付けて「量子論的慰霊」とも呼ばれようが、それこそは、世の全ての宗教の営む葬送儀礼の根本に共通してあるもの、「無くてならぬ唯一のもの」と言えよう。

結び

本稿を読まれた読者には、これが心霊論であるのか、科学論であるのか、その判断に戸惑われるであろう。心霊と科学という、文字通り水と油のごとき両者を、同じ鍋で料理する愚挙と批判される識者もあろう。しかし本稿は、心霊論でも科学論でもない。

「人間」という実体を中心に置いて、その物理的、生物的諸条件を超えた所に、その“実在を否定し難い死後生”のあることを認めて、その可能性の合理的根拠を追及した結果に導かれたのが、量子物理学であり、かつ「波動論」あっただけのことである。

元来、宇宙には「物質」の概念も「心霊」の概念もない。それは人間が作り出した勝手な分類に過ぎない。しかし宇宙世界を統べる唯一真正な原理があるならば、それは当然、我われが物質と呼ぶもの、心霊と呼ぶもの、そして死後生なるものをも含めて、等しくその原理によって解明されるものでなければならない。

そして現在筆者が知り得た限りでは、量子物理学の説く「波動論」こそは、ウォーレスの言う「頑固なる事実」と、その実証性の上に重く押し掛かっていた整合性や理論的一貫性の多くの疑問に、一挙解決の光りを射すものと思われた。量子物理学は、ひとり自然の物質世界を統べる理論に留まらず、心霊と霊界の物理学でもあるようである。